

## 編集後記

『ヴィクトリア朝文化研究』第21号をお届けします。

さる2023年4月13日にヴィクトリア朝文化研究の大家である会員の小池滋先生が逝去されました。本学会の会員のなかには、かつて小池先生のご著書を手に取り、その軽妙洒脱な文章をとおして、初めてイギリス文化の魅力、特にヴィクトリア朝という時代の奥深さに触れたという方も多いのではないかと思います。思い返せば、私も高校生の頃、安野光雅氏の装画に惹かれて小池先生の『ロンドン 世界の都市の物語』を読んだのが、イギリス研究との出会いだったかもしれません。この場を借りて故人のご冥福をお祈りするとともに、これまでの学界での多大なる貢献に感謝申し上げます。

さて、世間では2023年5月に新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類へ移行し、大学もおおむね平常の教育・研究環境を取り戻しているようです。また、学生たちを見ていると、数年間ほぼ止まっていた海外留学の動きが活発化しています。イギリス文化の研究者(とりわけ大学院生)にとって、やはり渡英して留学や資料調査をできるかどうかというのは死活問題ですから、今年に入ってそれらの海外活動が本格的に再開し、コロナ前の状況に復旧しつつあるのは喜ばしいことです。これから先、本学会の活動がますます充実したものとなることを期待します。

今回の論集では、7本の論文の投稿があり、厳正な査読の結果、2本を掲載いたしました。残念ながら今回掲載に至らなかった5本の論文も、それぞれ興味深い内容を含んでおり、査読のコメントをふまえてさらに発展していくことを期待しています。

なお、本号および学会ホームページにて公示しておりますように、大変残念なことに、過去の本学会誌にて掲載された記事について剽窃が確認されました。私も日頃から学生たちに剽窃という罪の大きさを説いている立場ですが、学会でこのような悪質な不正行為を実際に目にして愕然とする思いでした。これを教訓として、編集委員会としても学会誌のクオリティをさらに高めるよう、気を引き締めてチェック機能をはたし、不正行為の再発防止に取り組む所存です。

最後に、今号に論文を寄稿して下さった全ての執筆者、新たな研究を紹介して下さった書評者のみなさま、そして、お忙しいところ編集作業に献身的に関わって下さった編集委員に深く感謝申し上げます。また、学会事務局の玉井史絵先生、関良子先生にもたびたびご相談させていただき、大変お世話になりました。次年度より事務局の体制を一新すると伺っていますが、これまでのお二人のご助力に心より感謝申し上げます。最後に、前号に引き続き、今号の刊行にあたっては大日本法令印刷様にきめ細かいサポートをしていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。皆様ありがとうございました。

(伊藤航多)